



平成24年7月17日
内閣府（防災担当）

南海トラフの巨大地震モデル検討会（第20回）議事概要について

1. 第20回検討会の概要

日時：平成24年7月2日（月）15:00～17:00

場所：中央合同庁舎5号館 講堂

出席者：阿部座長、岡村（行）、金田、佐竹、平川、平原、福和、古村、翠川、山岡、山崎の各検討会委員、原田政策統括官、佐々木審議官他

2. 議事概要

津波計算等について、事務局から説明を聴取し、委員間で議論を行った。今回の議事の概要は次のとおり。

- 連動地震の時間差発生の影響の検討においては、紀伊半島の西側の地震と東側の地震に分けたモデルを考え、二つの地震が同時に起きたものと、時間差を持って起きた場合に、どの地点がどれくらい津波高が高くなるかということについて、比率で示すことにより、津波増幅の影響を一般化することができるのではないか。
- 検討している津波断層モデルを、今後どのように防災対策の検討に用いるかという議論が不足しているため、疑問が生じるのではないかと。
- 時間差を持った津波断層モデルになると、全域が一度に動く地震に比べると、すべり量も小さく、よって時間差を持って発生した場合、津波高は変動するが、その変動は最大のものに比べるとその津波高の範囲に収まっているなどの説明があるという。
- 基本としては大すべりの津波断層モデルが標準で、それが超大すべりになるとどのくらい津波が高くなるかというバリエーションを考え、同時に標準の大すべりで時間差があると津波高がどのように変動するのかというバリエーションを見るという考え方もある。
- 修正された表層地盤モデルは、地形とうまく合うような表現になっているのではないかと。さらに地形境界を考えて修正するとより良くなるのではないかと。
- ボーリングデータを用いた箇所での地盤モデルの修正であれば、モデルを構築する際の目的により修正することは理解出来るが、地形の影響による部分は吟味していく必要がある。
- 250mメッシュ単位で、微地形やボーリングデータから場所ごとに揺れ方が異なるということについて説明することが目的であれば、周辺の微地形を確認し、丁寧な修正を行うのがよいのではないかと。
- 施設設計で考える津波は確率論的なものであり、南海トラフで行っている地震モデルの設定の考え方とは整合しない。そこで、次に発生する地震として想定する対象の地震を明確に示す方がよいのではないかと。

- 頻度高く来る地震のうち、ときどき宝永のようなものがあるのであれば、国民向けにはやはり、宝永地震のようなものはレベル1の地震であると言った方がわかりやすい。
- レベル1の考えにものづくりから決まってくることが入ると、説明が難しくなる。ものづくりでは、ここでいうレベル1にこだわる必要はなく、ここのレベル1に対して自分たちの作るものはこう考えれば良いだけである。
- 頻度の高い津波とはなにか、レベル1津波とはなにかについて、委員の間で基本的な考えをはっきりさせ、社会に対して津波対策の想定に使わなければならない津波とは何かをはっきり示さなければいけない。対策の対象とすべき津波がはっきりしないため、最大クラスの津波があたかも対策すべき津波というような誤解を生んでいる。
- 頻度の高い津波を、中央防災会議が 2003 年に行った津波の想定と、今回の最大クラスの津波の想定との位置に置くかが社会から問われている。
- 発生頻度の高い津波という定義はあるが、もう数十年以内に次の南海トラフの地震が発生するというのはほぼ間違いない。であれば次の地震はどのような地震が起こる可能性があるのかということについては、当然社会は期待すると思う。
- 2003 年に被害想定を行ったときは、結局次に何が起こるのかわからないことから6通り考えた。次の地震は最大クラスになるかもしれないし、数年を置いて単独で起こるかもしれない。やはり次はわからないと言うのが正しい。
- 2003 年のモデルは安政、宝永を包絡するようなモデルであり、そういうものが1つの起こり得る地震として考えることは自然なのではないか。

<本件問い合わせ先>

内閣府政策統括官（防災担当）付

調査・企画担当参事官 藤山 秀章

同企画官 若林 伸幸

同参事官補佐 下山 利浩

TEL : 03-3501-5693（直通） FAX : 03-3501-5199